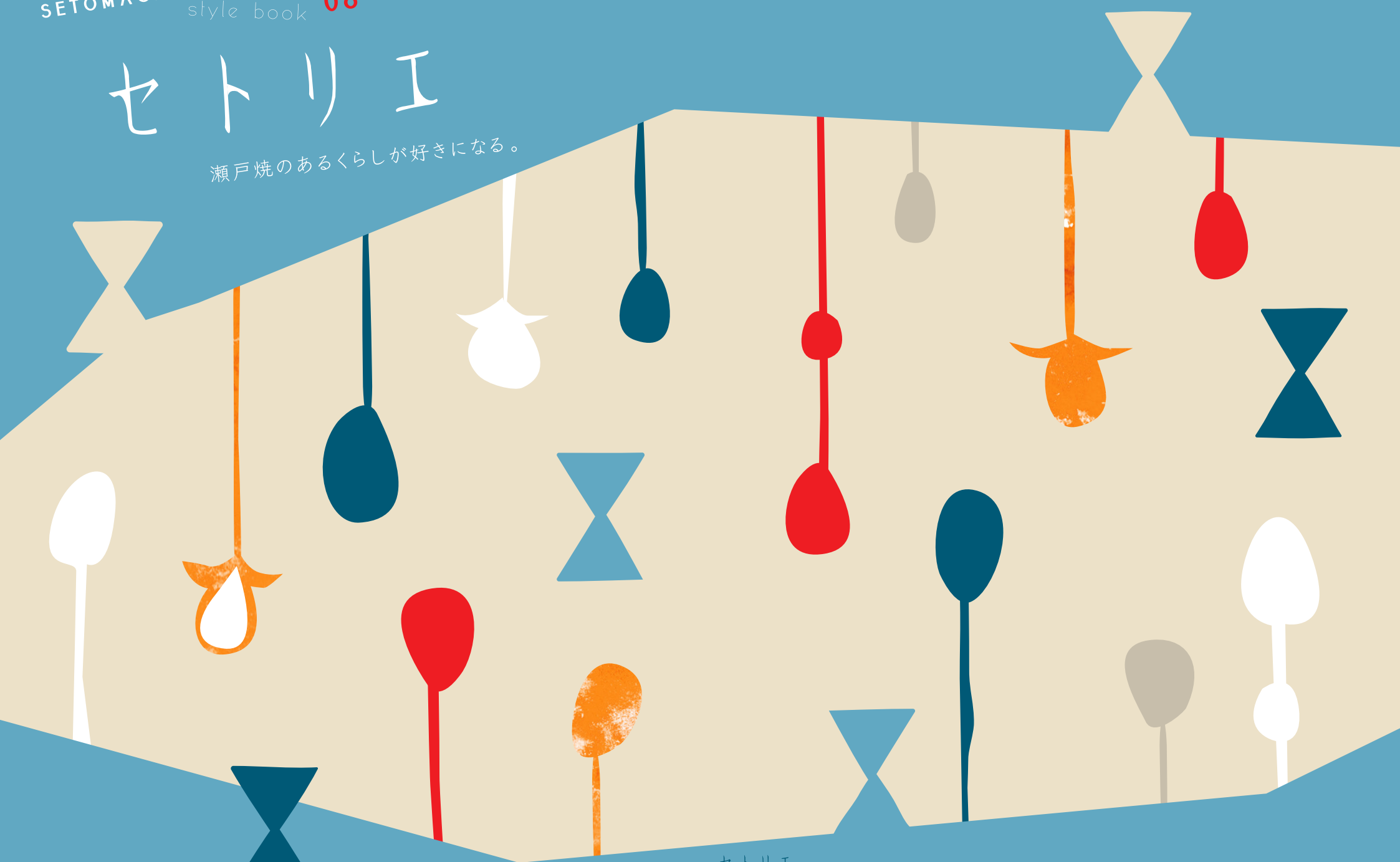


セトリイ

瀬戸焼のある暮らしが好きになる。



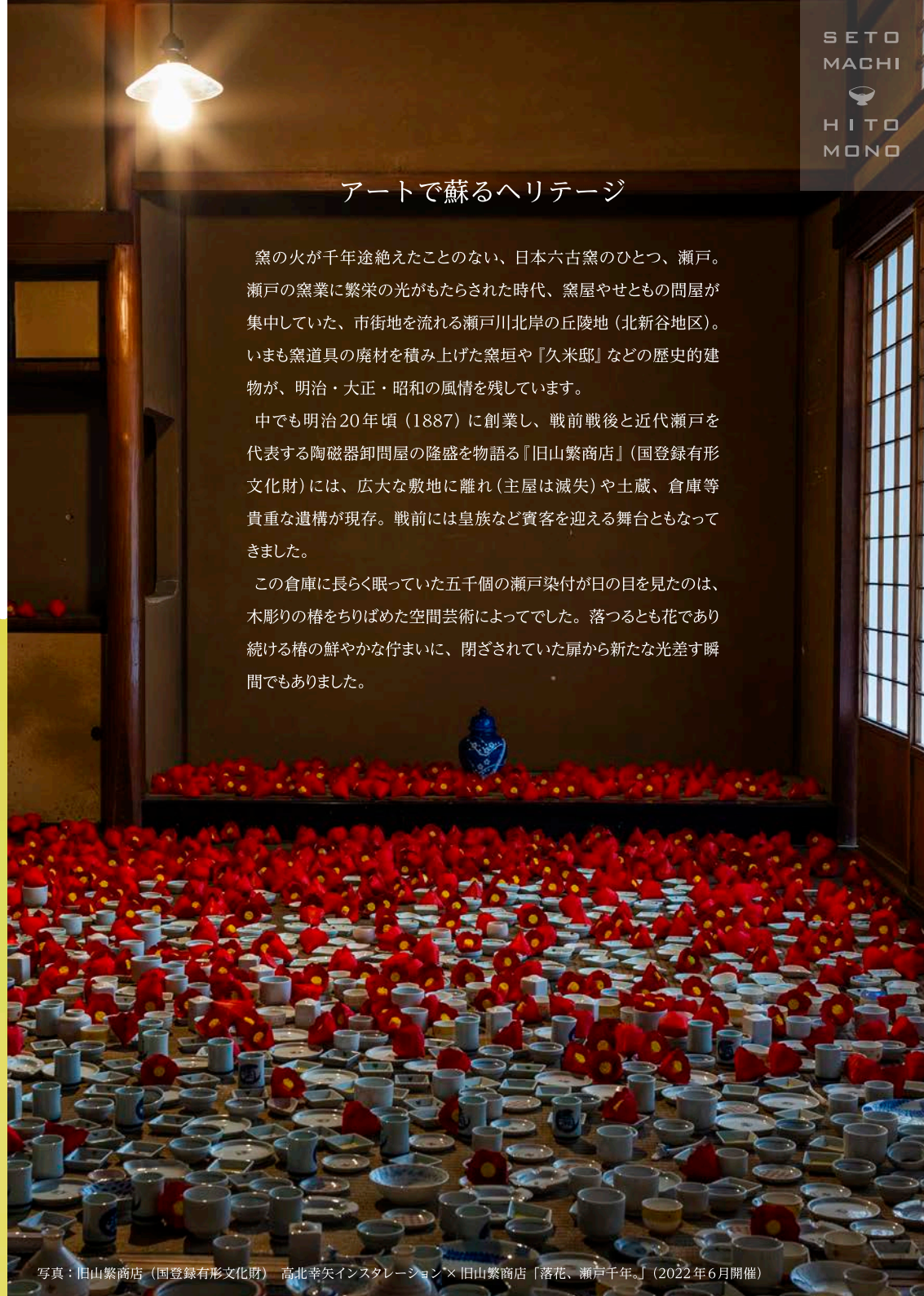
セトリイ SETOMACHI style book 06

アートで蘇るヘリテージ

窯の火が千年途絶えたことのない、日本六古窯のひとつ、瀬戸。瀬戸の窯業に繁栄の光がもたらされた時代、窯屋やせともの問屋が集中していた、市街地を流れる瀬戸川北岸の丘陵地（北新谷地区）。いまも窯道具の廃材を積み上げた窯垣や「久米邸」などの歴史的建物が、明治・大正・昭和の風情を残しています。

中でも明治20年頃（1887）に創業し、戦前戦後と近代瀬戸を代表する陶磁器卸問屋の隆盛を物語る『旧山繁商店』（国登録有形文化財）には、広大な敷地に離れ（主屋は滅失）や土蔵、倉庫等貴重な遺構が現存。戦前には皇族など賓客を迎える舞台ともなってきました。

この倉庫に長らく眠っていた五千個の瀬戸染付が日の目を見たのは、木彫りの椿をちりばめた空間芸術によってでした。落つとも花であり続ける椿の鮮やかな佇まいに、閉ざされていた扉から新たな光差す瞬間でもありました。



写真：旧山繁商店（国登録有形文化財）高北幸矢インスタレーション×旧山繁商店「落花、瀬戸千年。」（2022年6月開催）

瀬戸・藤四郎トリエンナーレ

瀬戸の原土

— せとのげんど —

可塑性に富んだ木節粘土や蛙目粘土など、

多彩な瀬戸焼を生む源となっている陶土。

古くから良質の原料に恵まれた瀬戸では

市内の陶土採掘場で「自ら土を採集し」

「自ら採集した土で粘土をつくり」

「自らその粘土で制作する」という

世界で唯一同じ素材で創作する公募展が、

三年に一度開催され、注目を集めます。

陶祖・加藤四郎左衛門景正（藤四郎）の

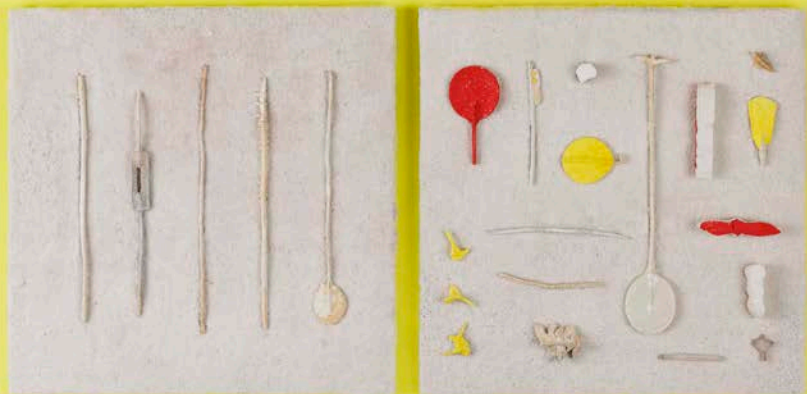
「陶祖800年祭（二〇二二〜二五）」を機に、

『瀬戸・藤四郎トリエンナーレ』として

初開催して以来、第四回を数えました。

恵まれた風土と先人の偉業を礎として、

現代陶芸の新たな息吹きが注がれます。



写真：第4回グランプリ（藤四郎賞）「ダーマトグラフの針の先」赤平史香さん（瀬戸市）

感情という ほむらのかたち



炭化錆彩茶碗（岩淵幸治／かつおぶし（尾張屋）

陶芸家の道を志して、盛岡から陶都瀬戸へ。

野に荒々しくつくね象られた「大種子」が、焚き上がる炎（ほむら）に包まれる。太古のやきものの原風景を蘇らす「野焼き」は、ひとの心を揺らし、煽情し、忘れかけていた熱い感覚を呼び醒ます。

「二〇一五年に開催された（風の沢ミュージアム・万葉祭）（宮城県）に呼んでもらい、屋外制作をしたのですが、これがおもしろかった。皆実生き生きとして、ガンガン薪を焚べて楽しんでるのを見て、〃焼く〃という行為はこんなにひとを興奮させるものなんだな。俺もこんな火の祭りをやりたい！〃と思いましたね」。そう嬉々と語る岩淵幸治さんは、岩手県盛岡市出身。インテリア関連の仕事を経て一九九七年に陶芸を学ぶために瀬戸へ。亀井幸一氏に師事し、オブジェを軸に制作に励んできた。

「瀬戸の環境は、他県から見ると陶芸をやるにはパラダイスなところだ」。それが作家としての創作の意義なのでは、と言葉をくださったことが深く響きました。もともと自己の考えのひとつでしたし、素直に落とし込むことができ、再び原点に立ち返りました。

それだけに、作品の発表や販売もオンラインのみで完結させるより、直接対話のある環境を求めたいという思いが強い。

「瀬戸のイベントに積極的に参加するのも、若手作家たちと出会い、意見を交わしたり、それがまた創作意欲にもなっていくから。今後は海外にも体当たりをしていきたいですね」。自ら〃感じる〃ことにピュアに向き合う。その生き方が、作品の固い礎となっている。

スなんですよ。原土をベースに使っていますが、そのへんを掘っても質のいい土が採れるし、何より配合や使い方などの情報や知識が豊富に得られるんですから」。

肯定あり否定ありの 練磨もまた創作の糧。

もうひとつ、岩淵さんの創作への姿勢を正す場として、一九三六年（昭和十一年）に設立された創作団体「瀬戸陶芸協会」がある。

「毎年新作展や展覧会が数回あり、個展とは別に先輩方から忌憚のない意見を直に聴ける貴重な機会となっています。今でこそ個々に情報発信や活動が容易にでき、フォローワー

（支持者）も得やすい時代だけど、肯定ばかりでは何が改善、練磨されるんか!?と思っちゃうんです（笑）。否定もあるからこそ、認められない理由を探り、それをバネに奮起できるし、より切磋琢磨し新しいことに挑戦したい！と思える。

〃陶芸ってなんだろう？〃と思想的に自問しつつものづくりに対峙できるところが、自分にとっては好い環境と言えますね」。

土という原料や〃焼くこと〃にさえ、固執しているわけではないという岩淵さん。故郷・盛岡市「旧石井県令邸」での展覧会では、漆喰を用いて〃焼かない〃作品を発表。「はたして焼く必要はあるのか？〃と思いついた作品で、〃陶

芸じゃない〃と否定的な声もありました。当然ですよ、焼いていないんだから（笑）。逆に肯定的な声もあり、どちらに寄せていくかを試しつつ進化させていくのもおもしろいなど」。

そんな自由闊達な岩淵さんだが、二〇一一年に発生した東日本大震災では大きな転機を経験した。

「それまで人間の感情や思考というものを自分なりに形にしたいと創作してきたのですが、故郷を襲った災禍に創作の意味を喪失し、何も手につかなくなってしまう。そんな自分に、亀井先生が〃東北の人のみならず、世の人々に岩淵君の作品を見て何かしらの感情を喚起してもらえたら、



「何でもやってみたいし、うまくやれないと悔しいんだよね」。工房も遊び場。



旧石井県令邸（岩手県）の洋館に展示された「焼かない」作品<MASK no.3>。

岩淵 幸治 Koji Iwabuchi

1970年岩手県盛岡市生まれ。1998年より亀井幸一氏に師事／2003年瀬戸市美術展市長賞受賞／朝日陶芸展・朝日現代クラフト展・長三賞陶芸展・日本陶芸展・美濃国際陶磁器フェスティバル等入選多数／瀬戸陶芸協会会員

🌐 <https://factorybucth.com>

撮影協力

尾張屋（おわりや）

「せと銀座通り商店街」にある創業約100年の乾物・割籾専門店。三代目の森宏子さんは、「だしソムリエ」としてこだわりの素材を厳選、使い方の相談にも応えています。「岩淵さんの作品に使ってもらえて嬉しいです！」

📍 愛知県瀬戸市朝日街29

☎ 0561-82-2406

🕒 10:00-19:00 🗓 水曜日

🌐 <https://owariya-seto.com>

📍 owariya_seto





Happy Sweets!

ほら、笑顔になれる
ドルチェ・ヴィータ。

いつものクロスを、すこし明るめに
窓からはたっぷりの光を呼び込んで
ちょっとブルーな気分が続いた時こそ
カラフル&スイートなおもてなしで
リフレッシュメントしちゃいましょう！
表も内側もカラフルなボウルには
完熟アップルマンゴーのジェラートや
ザックザクが楽しい宇治抹茶クロッカ
桃のコンポートとクリームチーズ
ピスタチオ、フランボワーズなど
ひんやりが美しシチリアンカッサータは
揺らぎやわらかなガラスのひと皿に。
幸せを運んでくるおまじないとして
エディブルフラワーも散らしてみたら
だれもがきっと、微笑んでくれますよ。
Sono felice! (うれしいー!幸せー)



佐藤愛子 工房 榎



山田奈緒子 吹きガラス工房「星(ひとしほ)」



網田真之 a.k.代表兼料理人

練込みボウル(右)
色の異なる土を組み合わせ模様を作る「練込み」技法を用いて、器やアクセサリーを制作。
<https://studiokai.stores.jp>
aliko_s_studio_kai

プレート「マナーブルー」
原料を空瓶100%とし、溶かしなおし・吹き・成形する吹きガラスで、気泡や厚みを生かした器を制作。
<https://hitotsuboshiglass.com>
hitotsuboshi_1

兵庫東西宮市にてスペイン料理店を経営。陶芸勉強のため瀬戸市に移住。「cafe 日傘」(火曜日)・予約制レストラン「PANDA couture」(金曜日)を運営
<https://arkseto.com>
arkseto



本場ドイツ産の素材と製法を極めた無添加バウムクーヘンと、長江哲男さん(更紗窯)の練上カップでいただくオリジナルブレンドコーヒー。

little flower coffee
 愛知県瀬戸市朝日町3-6 セと銀座通り商店街内
 日-木曜日・10-18:00 ☎050-3561-5587
 金-土曜日・10-21:00 🕒不定休
 https://www.littleflowercoffee.com
 littleflowercoffee



ともに名店を経験してきたバリスタで、共同代表の本田順也(右)さんと源平早彩(左)さん。「シェアロースター」を取り入れることで、コーヒー愛好家が集い、瀬戸での交流の場へ。

今日の
一服

little flower coffee

スペシャルティブレンドと瀬戸焼バウムクーヘンが結び、まちの輪。二〇二二年春「せと銀座通り商店街」に、新たな交流ベースとなるカフェが生まれました。フルーティーな香味が格別なスペシャルティグレードの珈琲豆を焙煎し、より親しみやすいブレンドにこだわって、挽きたてを一杯ずつドリップ。「小さな花を寄せたブーケのように、コーヒーも様々な国・品種のコンビネーションで豊かな風味とブーケ(香り)を楽しんでいただけたら」と本田さん。パティシエ経験を生かしたお菓子とのマリージュが人気です。

ものづくりの庭から

瀬戸のまちに吹く 風を伝えるひとの ヒトコトコラム

多様なアートが息づく街 Art Space & Cafe Barrack 代表・店主/美術家 近藤 佳那子 さん

瀬戸にやってきて、絵画制作の傍、自分たちで改装したスペースでカフェギャラリー『Art Space & Cafe Barrack』を始めて5年が経ちました。瀬戸で活動するようになって驚いたことは、アーティストの多様性や豊かさ、その数の多さです。ものづくりが日常にあるこの地で制作を行うアーティストは年々増え続け、陶芸家は勿論、ペインター、彫刻家、インスタレーション作家と、枝葉は広がりが稀有な土地の特色として表れてきたように感じています。

スペースを構えそこで生まれた交流の中で、驚きと静かな感動と共に気がついたこの事実を伝える為、瀬戸ゆかりの作家たちによる現代アートの展覧会『瀬戸現代美術展』を2019年から企画しています。

やきものを中心に「創造の街」として発展してきたこの街は、きっと古来より多くの文化の交差点であったでしょう。歴史と密接に関わった、複雑で時に無秩序にさえ見える風景は、遍歴の中で何度も作り壊され、残されてきた絶妙なバランスの中で、

伝統を重んじ、それでいて新しいものを受け入れ続ける隙間を温めているように思います。

この街で作品を作り続ける限り、私自身を含めそこに住む人々の生活が美しく楽しいものになってほしい。そういうものを生み出すパワーがこの街にはあると感じています。



2019年旧産業技術総合研究所中部センター瀬戸サイトにて初開催。2022年旧祖母懐小学校(プレエキシビジョン)・菱野団地各所にて開催。写真:谷川ヒロシ/藤村タカシ

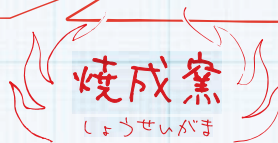
近藤さんの自家製メニューが人気のカフェ。奥のギャラリーでは企画展を開催 写真:濱津和貴



Art Space & Cafe Barrack

もっと知りたい! <瀬戸焼ノート>

2022.10



陶磁器を焼成する『窯』は、窯業・陶芸に欠くことのできない道具・設備です。代表的な焼成窯は、使用目的や熱源などによって分類されます。

ここが得意技!

重油窯 王子窯



重油(灯油)窯

薪や石炭より生産性(コスト・労力)が高く、かつ薪での焼成に極力近い風合いを求め、かつて多くの窯元が重油を燃料とした窯を導入。現在も稼働しているのは瀬戸では王子窯のみ。



ガス窯

燃料のガスは、プロパンガスと都市ガスの2タイプがある。酸化焼成/還元焼成が可能で、焚き口から炎を送り込み、ガス圧と空気量を調整して温度を制御。比較的均一に焼きあがる。

使用目的による分類

- ・素焼き (700 ~ 800°C) 磁器は高め
- ・本焼き (1200 ~ 1400°C)
- ・給付け (上絵)

熱源・燃料による分類

薪窯 / 重油(灯油)窯 / ガス窯 / 電気窯 など

新世紀工芸館



電気窯

家庭用100Vコンセントを使用するものから、200V電源を必要とする中型・大型窯まで様々な種類があり、主に酸化焼成に向いている。最も手軽で操作方法が簡単なため、初心者でも扱いやすい。

登窯 写真提供:美山陶房



薪窯

薪を燃やして火を起こす陶芸の伝統的な窯。薪割・窯の空焚き・窯詰め・窯焚きと、数日~数週間窯につききりで格闘しなくてはならないが、自然釉ならではの独特な風合いを生み出す。

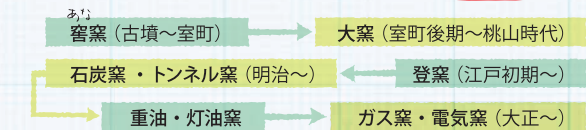
陶芸窯 基礎知識と 窯築記録

寺田康雄 著 里文出版(2020.5.30)



築窯50年に及ぶ陶芸家・寺田康雄氏(美山陶房)による、薪窯造りを後世に伝える貴重な実践記録。

日本の窯の遷遷



連房式登窯 写真提供:愛知県陶磁美術館



自然釉

窯の中で燃料の薪の灰(赤松など)が器に降り掛かり、1200°C以上で溶け、自然に釉薬状(ガラス質)になって表面に付着したもの。ビードロ、窯変など。

連房式登窯

斜面に階段状に焼成室を連ねた窯の総称。一般的に狭義の「登窯」と呼ばれている。中国・朝鮮半島から伝わり、16世紀後半に唐津で導入された。

赤津瓦

江戸後期~昭和初期まで生産された全国でも珍しい施釉の鉄釉瓦(現在は生産されていない)。赤津地区の雲興寺をはじめとした寺院や窯屋の屋根などで見ることができる。

セトリエ字引き

赤津瓦の窯元ごはん

昔ながらの赤津の風景を伝える赤津瓦の屋根
 陶房前の干し場に柵板を並べ、テーブルに。
 織部、黄瀬戸、御深井、志野に、麦わら手
 自分たちが焼いた器で、まかないごはん。
 代々続く窯元の味も釉のように多彩です。



「同じ釜の飯を食う」と言うように、ともにはたらく職人たちで囲む窯場の食卓は、やきものまち瀬戸ならではの原風景。手をやすめて、ほっと和むひとときでもあります。

かつては、火を入れたら何日も夜通しでの重労働が続いた窯焚き。薪をくべるのに忙しく、食事の暇もないため、ご飯とおかずを一緒に食べられる「ゴモ（五目めし）」を窯入れや窯出し後などにふるまい、労働習慣がありました。

一五〇年以上続く赤津の名門窯（作助窯）には、陶房の前に美しい庭が広がり、冬は蠟梅や紅梅、春は「玉手箱」の名を持つ椿、新緑や紅葉などが季節の色を映します。

いまや稀少となった赤津瓦の屋根を背に、素焼き前の生地がずらりと並ぶ天日干しの風景は、赤津の風物詩。毎年春・秋に開催される『赤津窯の里めぐり』では、蔵出し市やカフェ屋台などが並びにぎわいます。

五代加藤作助さんとともに窯を支えてきた加藤圭史さん（中央）。子どもの頃から職人さんたちと食卓を囲んできたそうです。その伝統が受け継がれ、妻の裕子さん（右から二目の愛情いっぱいの手料理が、皆の糧と癒しに。世代を交えての家族的な団らんに食も進みます。

「ゴモは、ご近所の青果店（八百大）さん自家製の懐かし味。「みんな大好きなんです」と裕子さん。赤津焼を贅沢に使った、窯元じまんのごはん時間です。」

瀬戸・ものづくりと暮らしのミュージアム 瀬戸民藝館

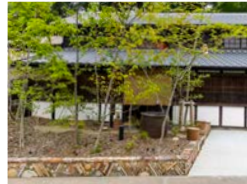
手仕事から生まれる「用の美」を
瀬戸本業窯の歴史とともに紐解く。

「物質的な豊かさだけでなく、より良い生活とは何か」。1926(大正15)年に柳宗悦をはじめ、陶芸家の河井寛次郎・濱田庄司らによって提唱された「民藝」。1950年代に瀬戸本業窯の六代水野半次郎氏がその活動に共感し、日本民藝館(東京)との交流が始まりました。濱田庄司とバーナード・リーチも同窯を訪れており、そうした影響から、瀬戸の手仕事の器や工芸品の数々も蒐集されていきました。

工芸ショップ
瀬戸本業窯の器コレクションの他、全国の手仕事による優れた手生活用具を展示販売。倉敷ガラスをはじめ、瀬戸本業窯と縁のあるつくり手の逸品も紹介。



連房式登窯
瀬戸市指定文化財(洞本業窯)
1979年まで実際に使われていた登窯。地域の有志とともに同窯が長年景観保存運動に取り組み、今回窯の内部まで整備。窯詰めの様子など窯道具で再現し、公開。



外構・エントランス
同窯で使用されてきた窯道具で、地元職人が窯垣を再現。植栽は、瀬戸の山で自生している樹木を使うなど、地域資源を活用。

瀬戸・ものづくりと暮らしのミュージアム 瀬戸民藝館

愛知県瀬戸市東洞町17 ☎ 0561-21-3773 入館料：一般 600円 / 高校生以下 300円
10:00-16:30 (16:00 最終受付) 休 月-水曜日(祝日は営業) 有 有



展示室1階
江戸時代後期以降に同窯が手掛けてきた日常使いの器約230点を展示。パネルや写真、映像で、瀬戸のやきものの歴史や窯について、また「馬の目皿」等の技法等を詳しく紹介。



展示室2階
昭和初期以降機械化が押し寄せ、手仕事の伝承が危ぶまれた時代に、民藝に傾倒し、一貫したものづくりに励んだ先代の暮らしや書斎等を再現。柳宗悦との書簡等も公開。



洞地区にて江戸後期より創業250年の『瀬戸本業窯』では、人びとの「暮らし」に根付いてきた文化とその魅力を伝え継ぐべく、工房に併設する登窯、資料館とショップを一体化して改装。2022年5月、ものづくりの歴史と暮らしの変遷を融合させ、「用の美」を学び体感できる『瀬戸民藝館』(館長は当代七代水野半次郎氏)へと生まれ変わりました。

「祖父・六代半次郎の民藝との交流を通して、当代である父が守り継いできた手仕事と文化を、多くのご協力を得て、こうして地域の皆さんと共有し、より多くの方に触れていただけたことができました。ぜひおでかけください。」



(八代後継 水野雄介さん)

MADE IN NEW SETO

瀬戸の「創り場」から発信

“陶芸の聖地”ならではの体験交流イベント
Land of Pottery - 瀬戸体感陶器市 -

開催日：2022年4月16日(土)・17日(日)
会場：旧深川小学校グラウンド(愛知県瀬戸市宮脇町53)



実行委員長 加藤真雪さん / 染付窯屋 眞葉

瀬戸の窯業の豊かさを
直に伝える場づくりへ

瀬戸のやきもの産地としての豊かさ、おもしろさ、強みは、良質な原料と千年以上の歴史に培われた高度かつ多様な技術にある。とはいっても、ある程度の精通がない限り、自分が手にした器がどんな原料でどのように作られたものかという背景に触れる機会はなかなかない。

「瀬戸には、陶芸家・窯元などのツクリテだけでなく、問屋、原料屋、材料屋、道具屋など、それを取り巻くさまざまな仕事があり成り立ってきた土壌があります。そうした多様なひと・コトに焦点を当て、直接つかい手に伝え、体感してもらええる場をつくりたい!そんな思いから、有志メ



「技法を見たらやっぱり買いたくなった」など大好評。

ンバーを中心に二〇一九年に「Land of Pottery」を立ち上げました。(実行委員長 加藤真雪さん / 染付窯屋 眞葉)
コロナ禍によりイベントは2年以上先送りとなったが、二〇二二年「せと陶祖まつり」同日の2日間、ようやく初の開催へ。「瀬戸体感陶器市」をコンセプトに、販売だけでなく、ツクリテによる公開制作や技法の紹介、陶芸道具・石膏型・釉薬のテストピース・原土等の展示、



実行委員会メンバーは、窯元・作家・商家・商社など、瀬戸の窯業界の代表者。

印刷・転写を使ったワークショップや陶片の発掘体験、ステータートークなど、まさに産地ならではのリアルなものづくりに触れ、直に声を聞けるテントが並び、キッチンカーも出て賑わった。子どもから、やきものファン、昔の瀬戸を知る世代まで、それぞれの目線で瀬戸焼の「いまをまさに」体感する新たな場づくりの幕開けに。

「作家と原料屋、職人とお客さまなど、これまで出会う機会があまりなかった業種・職種の出展者同士、お客さまとの直接対話や交流が生まれるなど、さまざまな手応えを感じました。リモートやオンラインの先に、お客さまが求めていることについて、こういふことなんだと、次回に向けより体感できる場づくりに取り組んでいきます。」



本物の出土品に触れられる!発掘ワークショップ。

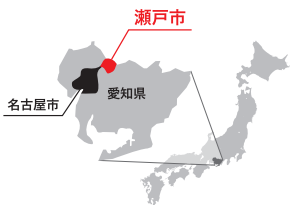
「釉薬のことならおまかせあれ!」
「anapan」Barickさん / 瀬戸民藝館 飲食店「食×器」の店主さん。

Setolier Information

セトリエ

セトリエ

- 瀬戸 + アトリエ = 瀬戸のまち全体がやきもの文化を生み出すアトリエという意味。
- 瀬戸焼の魅力を紹介するフリーペーパー。ツクリテとツカイテをゆるやかに結ぶ新しい世界を提案・発信。



瀬戸焼振興協会公式ホームページ

瀬戸焼の歴史や種類、扱い方・器のかたちについて、わかりやすく紹介しています。また、セトリエの最新号〜バックナンバーもすべて閲覧・ダウンロードできます。ぜひチェックしてみてください。



セトリエ
設置場所も
こちら！

セトリエ公式 SNS

最新情報をチェック！

紙面に掲載しきれないトピックスや各種展覧会、イベント情報を随時更新中。コメントもお待ちしております。



日本遺産ロゴマーク 瀬戸市ロゴマーク



日本遺産のまち
瀬戸市

SETO EVENT

- 1月下旬～3月下旬
陶のまち瀬戸のお雛めぐり
- 4月上旬
水野煮めぐり
- 4月第3日曜と前日
せと陶まつり
- 5月第2日曜と前日
赤津窯の里めぐり
しなの工房めぐり
- 9月第2土曜と翌日
せともの祭
- 9月下旬
来る福招き猫まつり in 瀬戸
- 10月
窯垣の小径まつり
- 11月第2日曜と前日
せと・まるっとミュージアム大回遊
ゆるり秋の窯めぐり

セトリエ動物園

古きも新しきも
みんなみんな福招き！



セトリエ 定期お届け便

セトリエの最新号を、毎号ご自宅やお店に、無料でお届けする「定期お届け便」のお申し込み受け付けをしています。ぜひセトリエ本誌を手に取ってご覧ください。

- 冊子も送料も無料でお届けします。
- 定期読者にイベントのご案内等をお知らせします。
- ※ このサービスとは別にセトリエを設置または配布していただけるお店や施設も、随時募集中です。瀬戸焼振興協会までご連絡ください。

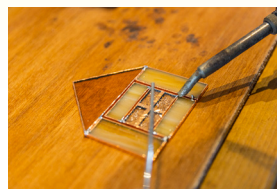
瀬戸焼振興協会
公式ホームページから
お申し込みください。



ずれないように正確にカット。バキーンと割れる音が気持ちいい。



テクニカルな工程は、山田さんが丁寧にアシストしてくれます。



ハンダを溶かしながら継ぎ目を盛り上げていくのが、おもしろい！

ぬくもりのある色合い、一点一点オリジナルデザインでつくるステンドグラスランプの専門店「Nijiro Lamp」。一軒家の工房 & ギャラリーにて、代表・山田貴子さんの指導のもとオーナメントづくりを一日体験！

まずは型紙に合わせて板ガラスをカットし、パーツをつくりまわす。切り口はグラインダーで整え、水洗い。カット面に銅製テープを巻いていき、ヘラで伸ばしながらしっかりと圧着させます。全パーツを組んで並べ、接着面をハンダで繋げたその上に、さらに盛って緑どり。色液で染め、拭き上げて完成です。



Nijiro Lamp make a Real

愛知県瀬戸市掛下町 2-57-1 8台

トライアルプラン

10:00～13:00 約120分程度 5,500円(材料・税込)

※予約可能日はHP及びInstagramに掲載

※カジュアルプラン(30分 2,200円～)も各種有り



【予約制】お申し込み先

090-5633-0732

makeareal10@gmail.com



今回の体験プランは「お家のオーナメント」

セトヤキギフト

瀬戸の間伐材とのコラボアイテム

双寿園キャニスター

やきものの産地・瀬戸では、かつて窯を焚く際に大量の薪が使われた時代もあったとか。その森の恵みを伝え継ぐには、適した間伐材を行い、木を使うことで循環を生み出すこと。

木を活用したもののづくりに取り組む『せとみプロジェクト』に賛同し、窯元として「産地を支えてきた森のためにお手伝いがしたい」と、瀬戸の間伐材を使用した蓋付きキャニスターが誕生しました。

お菓子やシュガーポット、お惣菜の保存・保冷にも重宝します。

双寿園オンラインショップ

せとみプロジェクト



容量約 200cc 磁器製 電子レンジ・食洗機可
(木蓋は電子レンジ・食洗機不可)

セトリエさんと体験しよう！ 第十五回
色彩とあかりのモザイクアート

ステンドグラス